

黒夢精神病院

ザツピー浅野

—— 狂気は最高の叡知である ——

「ああ、また血だらけだ。」

江口誠一郎は血まみれの両手を見詰め、溜息を吐いた。

何度洗ってもきりがない。

いま洗っても、どうせまた血で汚れてしまうのだ。

しかし、このままでは訳にもいくまい。

洗面所の前に立ち、蛇口を捻って流れでる水に手を浸す。その冷たさに、両手の神経が縮こまる。こすってもこすっても、指や掌に付着した血糊は落ちる事なく指紋の溝に入れ墨の様に張り付いた。江口はじれったくなり水を止め、白衣で手を擦った。

両手が小刻みに震えているのは、凍えるような水道の水のせいか、それともさつき迄の殺戮の余韻によるものか。

鏡を見る。白衣の胸の辺りに点描された返り血の痕など目に入らないかの様に、江口は振り乱れた髪を撫で付けた。

江口は鏡の前で背筋を伸ばし、一息つくくと、トイレのドアを開けた。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

その瞬間、けたたましい叫び声が爆発し、異様な影が襲いかかってきた。

「うおっー!」

江口は瞬時に身をかわず。女だ。

「おのれ、まだ生きていたか、このキチガイめ!」

江口は叫ぶと、身構えた。狂女は異様な妖気を発して江口ににじり寄る。その髪の毛は鱗蛇のように逆立ち、眼球が飛び出んばかりにむき出され、唇を耳まで裂き開き、額から顔にかけて数本の血の筋が簾に垂れている。手には鉈を持っていた。この女はいましたがた、消火器で思いきり脳天を殴打してやったばかりなのだが、致死には到らなかったようだ。人間離れた生命力である。キチガイと言うより、妖怪だ。

「ウギャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

女はもういちど耳が割れるような奇声を発すると、鉈を振り回して飛び掛かってきた。江口は敏捷にそれをかわすと、女の横面に拳の一撃を喰らわし、倒れたその上に馬乗りになった。白衣のポケットからメスを取りだし、それを女の首筋に深々と突き刺す。蛙がうがいする様な声が聞こえ、女の口から血の泡が吹きだし、絶命した。

……危なかった。まだ息があったとは。

江口は指先に付着した血を擦りつつ、また手を洗わなくてはならない事に辟易した。まだ微かに痙攣している女の足元を蹴飛ばし、トイレに戻る。

「先生」

背後で女性の声がある。助手の窪田今日子だった。

「患者さんがひとり、向かいの資料室に隠れている様です。今微かに声が聞こえましたわ」

「ああ、そんな処にまだいたか……で、片付けたのか？」

「まさか。やっぱりわたくしには無理ですわ。先生、お願いします」

「駄目だな。いつまでも患者のひとりやふたり、処理できなくてどうする。まだだいぶ残っているんだぞ。院外にも数人、脱走している可能性がある。早くしないと手遅れだ」

江口は白衣で手を拭き、今日子の前に歩み寄った。彼女の手にはメスが握られている。まだ血糊の付着していない、綺麗なものだ。身に纏っている白衣も新品同様で、皺一つ認められない。足元が微かに震えている。

「仕方ないな」

江口は今日子の肩をそっと触れるようにして通り過ぎると、トイレを出た。

死体をまたいで資料室の前まで来ると、扉に耳をすます。

……………キエエ……………キキキ……………キキキキキ……………

言葉にならぬ怪声。何かをひつかく音。紙を破る音。机をひっくり返す音。ピチャピチャと、液体を戯れにはじく音が聞こえる。明らかにキチガイの不条理な動きだ。その様子は何かに怯えている様でもあり、何やら悦に入っている様でもある。

「間違いない、いるな」

江口は今日子を見て頷いた。彼女は怯えた表情で肩を竦めている。握り締めたメスが小刻みに震えていた。

「待つてなさい、すぐ終る」

メスを握り直し軽く深呼吸をして、ひと思いにドアを開ける。刹那、「うつ」と喉を詰まらせ江口の肢体が固まった。片手で口と鼻を押さえ、吐き気を堪え、眼をこぼれんばかりに見開く。目前の地獄絵図に、言葉もでない。

壁も床も天井も、いちめん朱に染まっていた。病院の一室とは思えない、どこもかしこも血まみれである。机は散乱し、本は四方に投げ出され、そのことごとくに血の斑模様はんが点描されていた。

血の斑点は部屋の中心に向かうにつれて密度が高くなり、それがひとつの鮮赤と赤黒い曼陀羅模様の密集地帯となった処に、ひとりの男が立っている。ヘラヘラと笑いながら、こちらを見ていた。足元には肉の破片が散乱している。千切れた洋服、辛うじて形を留めている手足、胴体の部分部分から、ひとりの人間を殺してバラバラに解体して遊んでいた様子が伺える。

「あれは誰だ」

江口は患者から視線を離さずに訊いた。しかし背後からははあ、はあという息遣いが聞こえるだけで、要領を得た返事が返ってこない。一瞬だけ振りむくと、今日子は両手で顔を蔽^{おほ}ってガタガタ震えている。

「窪田君、しっかりし給え！ 眼を閉じている間に患者が襲ってきたらどうするんだ！」

「はあ……はあ、すいません」

「さあ、あれは誰なんだ」

「あの方は……206号室の山田さんです」

泣きそうな声で今日子は答えた。

「ああ、例の受験ノイローゼか。手を焼かせやがって」

江口は舌打ちすると、ゆっくり部屋の中に足を踏み入れた。血で足元がぬるりと滑り、危うく尻餅を突きそうになる。その瞬間、患者が弾かれた様に飛びかかってきた。手には棍棒の様なものを振りまわしている。人間の足だ。

「うわっ！」

江口は身をかわしたが、その拍子に足を滑らせ横倒しに倒れた。

患者は飛んで江口の上に馬乗りになると、奇声を発しながら足で江口の顔を殴り始めた。ひと振り毎に、遠心力で干切れた足の断面から血煙が噴きあがる。江口は余りの痛さと気持悪さに、身をよじらせた。

「窪田君！ 何をしている！ 早く助け給え！」

江口は足をばたつかせる。肉の塊が容赦なく江口の上半身を襲い、頭や肩に鈍痛が走った。意識が遠のいてゆくかというその時、ドンと鈍い音が頭上で響いてキチガイの動きが止まり、その手から肉の鈍器が地面に落ちた。そしてどうと、江口の上に倒れ伏した。

その背中には、新品のメスが深々と突き立っていた。

「窪田君……よくやった」

自分に蔽いかぶさった死体をどけ起きあがる。その姿は髪の毛から洋服、爪先に到るまで朱一色であった。しかめ面で口内に流れ込んだ血糊をペツペと吐いている。

今日子はまだ患者を刺した状態のまま震えていたが、江口の情けない血達磨姿を見て、思わず吹きこぼした。

「ういふふ……それではまるで、白衣じゃなくて赤衣ですわね」

湯船でお湯を弾く音が聞こえ、磨り硝子ごしに熱い湯気が立ち昇っているのが見える。今日子は江口の血だらけの白衣をごみ箱に捨て、戸棚から別の白衣を用意した。

「窪田君」

「はい」

「すまないが、石鹼を取ってくれ給え」

「はい」

今日子は立ち上がり、引き出しから買い置きの石鹼を取り出した。風呂場の扉を少し開け江口に手渡すと、生暖かく濡れた江口の指先に触れ、慌てて腕を引っ込める。そして背後で扉を閉めると、そのまま扉にもたれて息をついた。

「窪田君」

「は……はい」

「君は……本当に、素直でいい娘だな」

「そんな、先生」

今日子は顔を赤らめ、両手を頬にあてた。

ふだん仕事上のこと以外で滅多に口を開かない真面目人間の江口に、そんな事を云われたのは初めてだった。

「君は、ことし幾つだったかな」

「は、はい。二十三です」

「そうか。若いのに大変な目に合わせてしまつて悪かつたな。もう少し我慢してくれ給え。まもなく終るから」

「いいえ、わたくしの事なら大丈夫ですわ、先生」

今日子はごみ箱のなかの血に染まった白衣を見て、誰ともなしに微笑んだ。しかしすぐに真顔になる。

「先生……ちょっと聞いていいでしょうか」

「何かね」

「あの……わたくし、いまだによく把握していませんけれど、何で、患者さん達は皆、ある日とつぜん発狂してしまわれたのでしょうか。……それに、その患者さんを端からその……殺めてしまわなければならない理由が、本当にあるのでしょうか？ わたくし達は仮にも……精神病院ではありませんか。キチガ……いえ、その、極度にオカシクなつてしまわれた患者さん達でも、やはり心の病にたずさわる者として、その……殺してしまうなんて、どうしてもわたくし……腑に落ちない様な気がいたしますわ」

湯船から人の出る音がする。扉がガラリと開き、今日子は慌てて扉から離れた。白いタオルを腰に巻き、江口が出る。今日子は慌てて背を向けた。いままで白衣姿しか見た事のない江口の裸体を前にした羞恥心に、過ぎた進言をしてしまったという忸怩たる思いがふちどっている。

「窪田君」

「は、はっ」

「彼らの脳髓破壊はもう手の施し様のないほど進行してしまっているんだ。しかも、彼らの発狂は、どうも相互に感染しあっているくらいがある。そうでなければこれほどまでにキチガイの数が増える事が説明つけられない」

江口は頭を拭きながら、淡々と説明した。

この黒夢精神病院に、最初の攻撃性発狂患者が出たのは一週間前の事だ。

庭でキャッチボールをしていた二人の患者の片方が、突然暴走を始め、至近距離から相手にボールを投げつけ、気絶した処を奇声を発しながら首を絞めるという怪事が勃発した。

そこに通り掛かったのが江口だった。江口は慌てて患者を取り押さえたが、時既に遅く、相手の患者は絶命していた。発狂した患者は尚も奇声を発しながら、江口に異常な攻撃性を示してくる。江口は暴れる患者を取り押さえると、独房に閉じ込め、自体を報告しに医院長室に向かった。しかし医院長は不在であった。

同じ日の内に、続けて数人の患者の発狂が相次いだ。従業員も数人やられ、無残な惨殺死体となつて発見された。

急遽古参の江口を中心に会議が開かれたが、突然の異常事態に為す術を知らず、他の従業員達は何時襲ってくるやもしれぬ狂患者たちの脅威に怯え、話しの終決を待たずに一同は散り散りになった。

その後も患者の発狂は続き、三日と経たぬ内に、狂気の病原菌は全患者の脳漿を征服した。

以来、三病棟、庭を含めて平方約一キロメートル半の敷地内に、所狭しと、発狂徒と化した精神異常者達が跋扈している。その総数約百二十人。内、九十人以上は江口によつて始末されたが、残りはまだこの院内のどこかを徘徊している。病院の外壁の向こうに逃亡した者も少なからずいるに違いない。

患者の発狂現象が始まった日から数日間、たまたま今日子は非番だった。束の間の休暇を終え、出勤した今日子を待ったものは、既に阿鼻叫喚と化し、変わり果てた病院の姿だった。

「この病院には、もうわたくし達以外に業務員は残っていないのでしょうか」

「恐らくな」

新しい白衣に袖を通しつつ、江口は溜息を吐く。「みんな逃げたかキチガイに殺されたかだろう。院内に残っている荷物の持ち主は、全て死亡を確認した。ただ唯一、杉山医院長だけが、消息不明だ。医院長室はもぬけの空だが、彼のキャデラックは外に留ったままだ。あるいは、さっきのバラバラ死体が……」

今日子は顔を青くして、口を押さえた。

「申し訳ない。窪田君、思い出させてしまつて。お茶でもどうかね？」

「ああ、わたくしがいれますわ」

今日子はそそくさとヤカンに水を入れ、焔炉こんろにのせて火をつけた。

「でも……やっぱりわたくし、解りませんわ」

ありあわせの湯呑み茶碗を並べ、急須に茶の葉を入れながら、今日子は口あをもごつかせる。「こんな大変な事になつていてというのに、どうして警察に連絡しませんの？ わたくし達が命の危険を犯してまで、こんな事をしなければならぬ理由があるのでしょうか？」

暫く沈黙が続いた。江口は気難しそうに、腕を組んで空を見詰めている。ヤカンが笛を鳴らし、今日子は黙つて急須に湯を注いだ。そして二つの湯呑み茶碗を盆にのせ、テーブルに運ぶ。二人は茶碗から立ち込める白い湯気を挟んで、対座した。

「……仕方がない。君にもついに話す時が来た様だ。……まあ、いずれは話さなければならぬ事だつたのだが」

江口はひとくち茶を啜ると、部屋をグルリと見渡した。「……戦前より二十年以上続いたこの黒夢精神病院くろゆめせいしんびやういんも、これで終りだな」

今日子は端然たんぜんと襟を正し、江口の話しに聞きいった。

「君も知つての通り、この病院は昭和十年。今の杉山院長が創立したものだ。以来、今年昭和三十三年まで、かれこれ二十三年間、関東でも最先端の設備をそなえた精神医学施設としてその名を馳せてきた。……窪田君、君は、このこの院長の事はどれくらい知つて居るのかね？」

「はあ……どれくらいと云ひましても……」

「杉山胎蔵すぎやまたいざう。明治二十二年、宮城県生まれ。北福岡大学卒業後、地元の病院で内科・精神科の修練を積み、四十六歳で独立。上京して当病院を設立した。……そもそも彼が精神医学に興味を持ったのには、ある理由がある」

江口は指を一本たて、自らの頭を指さした。

「……彼の父親は狂人だつたのだ」

今日子は眼をまるくした。

「院長の家族はそもそも九州の小さな山村出身だつた。……村と云つても、二十戸ばかりの本当に小さな村だつたらしいがね。山肌へばり付いた様な処に、点々と家があつた、杉山家はその中の、一番大きなお家柄というか、まあ地主とか庄屋といった家系だつたそうだ。その村は今では廃村になつて居る。医院長はそこで、十歳迄を過ごした。……窪田君、ちよつとこれを読んでみ給え」

江口は鞆の中から一冊のファイルを取り出し、小さな新聞のキリヌキを差し出した。

日付は明治三十二年。恐ろしく古い。

今日子はそれに目を通し、読み終ると、息を呑んだ。

《宮城県發》 村人全員が惨殺されるといふ怪事件が発生。被害者は村の住人・杉山隆藏すぎやまりゅうざう（37）。證言に據れば隆藏は素より精神に一抹の異常が認められ、平素より奇怪な行動が目についたといふ。隆藏は事件当日未明、突如として農耕具用の備中鍬を持ちだし、村人達を端から惨殺してゐた模様。発見者は週に一度村を廻つてゐる麓の駐在員で、隆藏が殺めた死体を山と積み上げ、獨り自慰行為に陥つてゐた所を取り押さえられた。生還者は騒ぎの間中藏に息を潜めて隠れてゐた隆藏の実子・杉山胎藏（10）他、数名。村は平素より近隣の村との交流が殆ど無い為、発見が遅れたものと思われる。…》

まるで、いま流行りのカストリ誌に掲載されている猟奇探偵小説を地で行く様な事件である。今日子は記事から目を離すと、震える手で江口に差し戻す。江口は無言でそれを受け取ると、再びファイルに仕舞つた。ファイルにはその厚みから、まだ他にも色々な資料が入っていると思われた。

「云うまでもなく、その発狂した杉山隆藏というのが医院長のお父上だ。…世にこれほど異常な怪事件は滅多にあるものではない。まさに正氣の沙汰とは思えない地獄絵図だ。自分の家族も、平素より仲良くしていた村の人々も、一瞬にして目の前で惨殺されてしまったのだから。しかもそれが自らの父親の仕業ときている。この怪奇現象が、幼かつた医院長の脳髓に強烈なトラウマとなつて、後の人生に影響を及ぼした事は想像に難くない。…医院長はその後福岡の親類の家庭に引き取られ、成長した。大学では精神医学を専攻し、幼い頃の実体験も手伝つて、ますます人間の精神の深遠に潜む謎に魅入られていった…」

「しかし、先生。わたくしどうしても、腑に落ちませんわ」

「何がかね」

「その…その記事の事ですけれども…幾ら何でも、それまで普通に生活していた人間が、ある日突然、身の回りにいる人達を端からみんな惨殺してしまうなんて…いきなりそんな、極端にオカシクなつてしまうなんて事があるものなのではないでしょうか。…何だかわたくし、信じられません」

「そこがこの怪事件のポイントなんだ」

江口の瞳が妖しい光を發した。「人間がある日突然発狂し、身の回りの者を惨殺して廻る。…これはまさに、今のこの病院の状況と一致していると思わないかい」

今日子ははつと目を見開いた。江口は続ける。

「…数十年前、医院長の実父が発狂し、村人達を惨殺して廻つた。そして今、医院長の管理する精神病院の患者が一斉に発狂し、平和だった当病院を惨劇の館へと一変させてしまった。この時空を越えた、二つの酷似した事実を繋ぐものは何か。…それが実は、ひとつだけある」

「それは、…何なのですか？」

「医院長の家系に代々伝わる古文書に『驚愚羅魔愚羅』というものがあつたのだ」

「ど……『ドグラマグラ』!？」

今日子は思わず、唇の隅からお茶をこぼした。

三

「もともと『ドグラマグラ』という言葉は江戸時代、吉利支丹きりしたん伴天連ぼてれんの使う幻術や魔術の事を指す長崎地方の方言だったらしい。語源は不明だが、これに『堂廻目眩』や『戸惑面喰』等の漢字を当てる場合もあるそうで、一般的には人間から一切のあらゆる常識的な感覚や正常な意識を奪い、前後不覚の支離滅裂な状態に陥れる一種の幻覚作用を意味する言葉という解釈が出来る。……杉山家がこの古文書を何時から、何時の代から受け継いできたものかは解らないが、とにかくこの書は代々、門外不出の封印を押され、杉山家の奥の誰の目にも触れない場所に保管されてきた」

「その古文書には……いつたい、何が……」

「それが、解らないのだ。……その古文書に何が記されているのか、それは誰にも解らない。そこには何か、異常極まり無い惨たらしい絵が描かれているという話もあるし、訳の解らない呪文のようなものが書いてあるという説もある。……詳しい事は解らない。それというのも、その古文書はある種の呪いの様なものがあつてね。それを開いて中身を目にしたが最後、ただではすまないというのだ」

「ただではすまない……とおっしゃいますと……」

「その古文書を見た者は、一瞬にして脳髓に異常をきたし、発狂してしまうといわれている」
「……………」

「誰も中身を覗いた事が無いのも道理だ。……それを眼にした途端、その者は正常な人間としての判断力・自意識を失ってしまうのだからな。……その古文書が『ドグラマグラ』と呼ばれたしたのは明治か江戸時代の末期頃からで、本当のその書物の名は誰にも解らない。表紙には何らかの文字が書かれていた様だが、医院長の祖父の代には既に風化して読めなかったそう。ただその古文書にまつわる云い伝えだけが残っていて、その意味合いから何時しか『ドグラマグラ』と呼ばれる様になっていった。……その古文書自体は数百年の昔、医院長の祖先に何者からか伝わってきたものらしく、出所は今をもってして不明だ。……どこの誰が齎もたらし、どういう経緯で杉山家が保管する事になったのか」

「それが本当だとしたら、わたくしの想像の許容範囲を遥かに越えておりますわ。そんな古文書が存在するという事も、それを訳も解らず、一家系が代々守ってきたという事実も……」

「しかし、それが事実なのだ。その古文書は間違いなく存在する。そして六十年前医院長のお父上を襲った狂気と、今回の当病院に巻き起こった怪事を裏打ちする要因は、それ以外に考えられない」

「まさかー！」

今日子は絶句した。「まさか……それでは先生は、患者さん達がこうして発狂してしまったのは……その古文書が……原因だと……？」

「その通りだ」

「その……『ドグラマグラ』が、この病院の何処かにあるというのですか？」

「ある」

江口は断言した。「医院長は、『ドグラマグラ』を村から持ってきている」

「そんな……仮にも、その古文書の効果が事実だとして、そんな危険極まりない書物を、どうしてわざわざ持ちだす必要があるのでしょうか？ そんな気持悪いもの、お祓いでもして、燃やしてしまうべきですわ！」

「窪田君、医院長が精神医学を志したのも、『ドグラマグラ』を研究する為だったのだよ」

「……………」

今日子は愕然として、言葉を失った。「研究……その様なものを……？」

釈然としないのも道理である。何の必要があつて、そんな迷信めいたものを研究するということか。本当に研究をするのだとしても、それなら精神医学ではなく、考古学か神秘哲学かなにかの分野ではないか。第一、研究すると云つても、ひと目内容を紐解いたが最後、精神に異常をきたしてしまう様なものを、どうやって研究しようというのだろうか。

「君の疑問はよく解る」

江口は今日子の沈黙に頷いた。「研究者が研究対象を一度開いて発狂してしまったら、もう研究どころではないからな。黄熱を研究していた医者が、そのウイルスに感染して死んでしまう様なものだ」

今日子は頭を抱えた。

「わたしには解りません。解らない事だらけですわー！」

今日子の脳髓に、数々の不可解なキーワードが渦を巻く。人を狂わす古文書。六十年前に起こった惨殺事件。医院長の謎の研究。何処迄いても迷信臭さの域を脱しない。しかし、いまこの黒夢精神病院を襲っている全精神患者の発狂という怪事だけは、紛れもない現実なのだ。

「……………さあ窪田君、そろそろいっしょ」

江口は冷えた茶を飲み干すと、立ち上がった。手には真新しいメスが握られている。「我々の仕事はまだ終わっていない。医院長の身に何が起こったのか。彼の研究とは一体何だったのか。そして今『ドグラマグラ』は何処にあるのか。それは誰にも解らない。いまの我々に与えられた使命は、目の前の現実を事実として受け止め、速やかにこの惨劇の幕を引く事だけなのだ」

江口の瞳が、異様な妖光を發して今日子を見据えている。今日子は立ち上がった。今は、江口を信じてついてゆくしかない。

今日子は目を閉じ混沌とした頭の中を漂白すると、がばと江口の胸に飛び込んだ。

「先生……」

「窪田君……」

江口は今日子の身体を引き離し、踵きびすを返して扉に向かう。

「窪田君」

背中ごしに、江口は云った。「……もうひとつ、この事件には不可解な経緯がある。『ドグラマグラ』は実は、この病院の開設以来数十年、院長室の金庫の中に保管されていたのだ。それが、最近、何者かの手によって盗み出された。……そしてその一週間後に、患者の發狂が勃発している。杉山院長が行方不明になったのはその直後だ」

「え……？」

「やあ、いんぞ」

江口はドアを開けると、廊下に出た。今日子も慌てて後を追う。

廊下には、この一週間、殺しも殺した患者の死体が数メートル置きに転がっている。それらが無造作に飛び越え跨ぎつつ、江口は進んでいった。

今日子は縛れそうな細い脚を引きずる様にして、ついてゆくのがやっとだった。

その時、今日子の頭の中に、恐るべき憶測が浮かんだ。

「ま……まさか……」

杉山院長の研究。

ドグラマグラ。

この、病院の全患者が發狂するという恐ろしい怪事自体が、院長の研究の『実験』なのだとしたら？ 『ドグラマグラ』の盜難は演出で、院長はこの病院の患者全員をモルモットとして使っているのだとしたら？ この憶測を裏付けるかの様に、院長は事件を堺にプツリ姿を晦ましている。

そしてこの黒夢精神病院という医学機関そのものが、院長の生涯をかけた大いなる研究の実験場として、最初から設立されたものなのだとしたら……？

江口の後ろ姿を見やる。背後の今日子の存在など意に介しない様に、黙々と歩を進めている。しかし、今日子でさえ気がついたこの憶測を、当の江口が一度も脳裏に浮かべていない筈はない。江口には何かしらの答えが固まっているのではあるまいか、そんな気がした。

それに、江口が、確かに当医院でも最も古くから勤務している、杉山院長の右腕だったほどの人物とはいえ、これだけの事実をどうやって知りえたのであろうか。江口が杉山の『研究』にまで右腕として携っていたとは思えない。しかしそれにしては、江口は明らかに知りすぎて、いる様に思えた。

「……そんな……先生……わたくしには……解らない事ばかり……先生は……先生は……
いつたい……?」

今日子は自らの混乱した精神の圧迫に押し潰されそうになり、脚をふらつかせ、死体につま
ずき、そのまま昏倒した。

四

聞こえるか聞こえないかくらいの音量で、人の声があった。

その声の方を振りく。しかし何も無い。

それどころか、今日子はさつきから、一切の光から断絶された暗闇のなかに佇んでいた。ど
こを向いても、目に入る光景は暗澹たる闇が支配している。

その内すぐに、声があったのは何秒前か、何分前か、どこから聞こえたのか、また本当に声が
したのかさえ、さっぱり解らなくなった。ただ暗闇だけが確かな実感をもって、全ての空間的・
時間的な方向線上に広がり、彼女の五感を支配している。

果てしない闇の世界。

記憶の糸を手繰ってみる。どうして自分はこんな処にいるのか。いつからこうしているのか。
そして、ここは何処なのか。

何処かにいて、突然闇が訪れたという記憶はない、どちらかというと、いつの間にかここに
いたというに近い。

自分は意識を失っていた? そしてその間に、ここに連れてこられた? 自分はここで目を
覚ましたのか? いつ? いま気がついたばかりだとも云えるし、ずっとここでこうしていた
様な気もする。

どちらにしろ、一切の時間的な感覚を損失している以上、大した問題ではなかった。

自分がこの前に意識を持っていたのは、どこだったか。何処で意識を失ったのか。自宅でか、
それとも職場だったか。自分は何をしていたのか。思考を巡らすと、ずいぶん前の出来事が、
ざつくばらんに泡の様に浮かんでは消え始めた。

小さい頃の記憶、初めて就職した時の事、今まで世話をしてきた患者さん達、一緒に働いて
いた仲間、毎日目にしていた病院の白い壁、医療機器、休みの日買い物に行った時の事、友達
と電話で話した時の事……

ランダムな記憶の断片はいつこうに収集つく事なく、とりとめなく浮かんでは消えてゆく。
まず今日子は、その断片の中から隣接したものどうしを比べ、より最近の情報を選び抜いてゆ
く事から始めていった。

今日子は脳が割れんばかりに思考をめぐらした。少しでも気を抜くと、混沌した意識に押し流されそうになる。

暗闇とは何と狂おしい状況であろうか。目を閉じてでも開けても闇ばかり。ある意味では幾万の色彩に囲まれた万華鏡の中にいるよりも、混沌とした状況といえるのかもしれない。黒とは、あらゆる色彩という色彩を混ぜ合わせた色であるからだろうか。闇の中には、あらゆる人を狂わす毒毒しい色が潜在的に宿っているという事なのだろうか。

ひとつひとつの記憶を整理していった結果、今日子の頭の中にはいつしか病院での光景ばかりが残された。

病院。

黒夢精神病院。

病院での日々。

しかし、そこ迄だった。

今日子の意識には、病院での日々の業務を繰り返す自分の姿だけが映し出されるばかり。何の変哲もない、一昨日と同じ昨日、昨日と同じ今日、今日と同じ明日、明日と同じ明後日。同じ様な日々。いつもと同じ、病院の建物、壁、廊下、器具、天井、ベッド、庭、人間模様。同じ会話、同じ作業、同じ毎日………。

何処迄いっても、今の自分の異常なる状況へとつながる特定の出来事に出くわさない。ただ機械の様に繰り返される毎日の記憶。

今日子はいつしか、同じ事を繰り返すだけの意識の自動作用を認める事によって、妙な心の落ち着きを覚え始めた。逆に、そこからまた新たな思考を開始しようとすると、全ての記憶が再び闇に吸い込まれ、混乱と狂気の精神状態に戻りそうになる。だから、慌てて思考を自動運転に切り替える。

今日子はうずくまって、勝手に垂れ流される単調な記憶の渦に、身を任せた。任せるしかない。その内に、この記憶の単調な流れも、無に帰する事になるのだろう。そして、自分はこのまま石にでもなってしまうのではあるまいか、そんな気がした。

それでも別に構わない様な気がした。

しかし、突然、変化は訪れた。

今日子はいつもの様に、病院の門をくぐった。

建物の中に入る。何故か、いやに人気がない。いつもなら廊下に誰かしら人間の姿が認められるものなのだが、その日に限って誰もいない。受付にも、事務室にも、誰もいない。

今日子は辺りを見回した。

ふいに妙なものを目にして、目を細める。

あれは、なに？

廊下の向こうに、なにかがある。人が……倒れている？
今日子はそこに向かってゆつくりと歩きだした。

あれは、何だろうか。間違いなく人が倒れているのだとしても、その回りに赤黒く広がっているのは、まさか、血だろうか。
死んでいる？

鼓動が激しく打ち始める。手に汗が滲みだし、次第に息が荒くなる。目標物まであと五メートルほど。間違いなく、そこに人が血を流して倒れているのが解った。しかし、今日子の理性はまだそれを認めてはいなかった。

「窪田君」

心臓がひとつ、ドキリと廊下に鳴り響いた。

「窪田君、落ち着くんた」

誰かの両手が、背後から今日子の肩を鷲掴みにする。

「……せ……せ……先生……？」

今日子のはじかれた様に手を振りほどくと、数歩離れて振り向く。そこにはいつもの白衣を着た、江口の姿があった。

「先生、江口先生！」

今日子は江口の胸に、飛び込んだ。

五

昭和三十三年、夏。

「昭和三十年代はもはや戦後にあらず」との国民生活白書の言葉どおり、日本はここ数年で急激な経済的成長を遂げ、東京の人口は爆発的な増加の一途を辿っていた。

街の街頭テレビに映し出された力道山のプロレスに大衆は群がり、海外から輸入されたロカビリーと称する音楽に若者達は熱狂する。

ここ池袋周辺も、つい数年前まで焼け野原だった大地を見る影もなくアスファルトが覆い隠し、人々は暫く終る事のない栄えるばかりの未来への幻想に酔いしれていた。

もともと池袋は現代でこそ最先端の文化・歓楽都市のひとつとして華やいでいるが、昭和五十年代にサンシャインや芸術劇場、高級ホテル等の高層ビルが林立する様になる迄は、駅前デパートを中心とした純然たる商業都市としての色合いが強かった。平日の昼間などはスーツ姿のサラリーマン、主婦、暇を遊ぶ初老の紳士などが多く目につき、まだ学生などの若者達の姿は余りない。

皆、忙しそうにビルの間を歩いている。

他人の存在など一切意に介せず、ひたすら自己の道ならぬ道を進んで生きている。

様々な人間模様が交差する都会の殺伐とした風景は、この頃から変わらなかつたに違いない。今ここで、誰かがうずくまって倒れても、空から自殺者が降ってきても、殆どの通行人は気がつかずに歩き続ける事だろう。

その証拠にほら、いまそこを歩いていた男の首が宙に飛んだが、誰も反応がない。

続いて、その後を歩いていた男女二人の首がポン、ポンと切り落とされたが、やはり誰も振り向く者はいない。

首を一瞬で失った三体の身体はそのまま二三歩あるいて、切り落とされた順番に、将棋倒しにたおれた。

一人の女性がやっとそれに気がついて、立ち止まった。

目を丸くし、それを眺める。

いったい、何が起こったのか。

自分の常識内で処理できる範囲を越える出来事に、言葉を失う。

倒れた胴体の断面から血が噴きだし、女性の足に降り注ぐ。思わず後ずさりし、背後に転がっていた生首を踵で蹴る。

首は転がり、側を歩いていたサラリーマンが足を捕られ、音をたてて転倒した。

瞬間、女がけたたましい叫び声を上げた。それを切っ掛けに、それ迄のコンクリートの様だった単調な空気が一変した。

無造作に転がった三つの胴体と三つの首。そこから凄い勢いで流れでる血飛沫に瞬く間に巨大な血溜まりが広がる。

やっと異常事態に気がついた周囲が、途端に騒々しさを擁した。

女の悲鳴、男の喚声、気を失う者、寄ってくる者、逃げ去る者。ある者は目をぎらつかせ、ある者は嘔吐し、ある者は放心状態で眺めている。

まるで死んでいた都会が、僅か三名の血の生贄によって生き返ったかの如くであった。

その時、死体が転がるビルの壁にへばり付く様にして立っていた一人の男が、一步前に進み出る。足元で血がピチャとはじけた。

男はへらへらとした微笑を称え、その手には、大きな刃物を持っている。それは血だらけの鉞だった。

男は白い服を着ていたので、白いビルの壁に保護色となって余り目立たなかつたが、動いた事により、群がった大衆が一斉に彼の存在に気が付いた。

恐怖に辺りの空気が凍りつく。

男は奇声を発し、ぎこちなく、それでいて俊敏な動きで、右上から左下へと、鉞を斬りかざし、群がった人壁に巨大な傷口を深々と刻印した。

右端にいた男の首は皮一枚を残してぶらさがり、その隣の女の肋骨は砕かれ心臓から血飛沫が舞い上がり、その隣の女の腹は破れ内臓が珠洲なりに溢れ落ち、左端の男の左足は骨ごと切断された。

既に相当な血を吸った鉦でこれほどの殺傷を行使できるのは、並の筋力ではない。男の潜在能力は、異常をきたした精神により限界値にまで開放されているのだろうか。確かに、爬虫類の様な、異様な眼光を発する男の目には、理性の輝きは微塵もない。

密集して群がっていた人々が、飛ぶ様に四散した。男は走ってそれらを追いかけて、逃げ遅れた者から、次々と鉦の餌食にしてゆく。まるで薪でも割る様に、端から人間が壊れていった。

男は獲物を追いかけて、尚も走る。

角を曲がるたび、事態を知らぬ人々がざくざく殺されてゆく。

先ほどの最初の女の悲鳴のゴングからまだ一分足らずだが、既に軽く二十人は殺られていた。

「へへへっ！ げへへへっ!!」

キチガイは笑い、殺し続けた。

殺戮開始から二分をちよつと過ぎた頃、ようやく警察がやってきて、男を取り囲んだ。

自分に向けられた無数の銃口の意味を理解したのか、男が動きを止め、立ち止まる。しかし

その顔は、何も恐れる事などない様に、まだ笑っていた。

男はゆつくりと鉦を振りかざす。

一斉に、銃口が火を噴く。

男は胸から数本の血の弧を描いて、仰向けに倒れた。

六

「やっと気がついた様だね。待ってたよ」

唖れた男の声がした。

今日子は目を開けた。

「……………は……………?」

今日子は周辺を見渡した。白い壁、葉の匂い、病院に違いないが、黒夢精神病院ではない様だ。今日子はいちど目を擦り、正面の大きな机に腰かけた人物を見て、息をのんだ。

「い……………: 医院長、杉山医院長!」

まだ幻想の世界の続きにいるのだろうか。今日子は机の上に両手をつく。卓上のヒヤリとした感覚が手に伝わる。さつき味わった闇の世界とは違う、確かな実感を伴った肉体の感覚だ。

「久しぶりだな」

黒夢精神病院、医院長。

杉山胎蔵。

頭髪は殆どなく、頭の形が単峯駱駝ひとこづつくだの背中のように歪いびつに盛りあがり、厚い唇と大きな瞳がその老体に似付かわしくないただならぬ威圧感を醸し出している。無精髭を生やし、ヨレヨレの白衣を纏っているのは相変わらぬだ。

「とりあえず、いまの気分はどうかね？」

「え……江口先生は、どこですか？」

混乱の渦の中、今日子は訪ねた。そんな彼女の気持を嘲笑あざわらうかの様に、杉山は愉快そうに云う。

「あの男か……あの男は知らんよ。君をおいて勝手に何処かへ行ってしまった」

「え……江口先生に会わせてください！」

今日子は言い様のない不安をかきちらす様に叫ぶ。

いままで少なからず尊敬の念さえ抱いていたこの人物であったが、いまでは例え様のない嫌悪感を感じさせる。戸惑う今日子をからかう様に言葉を放つ老人は、一城の主として黒夢精神病院に君臨していたあの医院長とは、まるで別人だった。

「知らんと云っておるだろう。もうあの男は僕の部下でもなんでもない。……あの男は有能な部下だったかね。ちよつと出しゃばり過ぎたよ」

「ど、どういうことでしょうか？ 江口先生は、わたくしの最も尊敬する上司ですわ」

杉山は嘲弄ちょうりやうの笑みを浮かべると、二ミリほど伸びた顎髭をこしごし擦り、大きな目をギョロリと動かした。さて何から話したものが、言葉を選んでいる様だった。

「……君は、ドグラマグラの事は、江口からどれくらい聞いておるのかね？」

「……………」

今日子は思わず喉を詰まらせる。ドグラマグラ、その一言が、問題を唐突に確信に近付けた様な気がして、意識に食い込んできた。

「なにか話しておつたらう。云つてみなさい。そいつの事を、奴は何と説明したんだ」

杉山の声が威圧する様な調子に変化した。今日子は恐る恐る口を開く。

「それは……医院長の御家族に伝わる古文書の事ですわ。それを紐解いたものは、一瞬にして精神に異常をきたし、発狂してしまうという云い伝えがあるという。……その様なもの、迷信に決まっていますけれども」

今日子の脳裏に今日一日の黒夢での異常な出来事が、走馬灯の様に甦る。飽きるほどの狂人の死骸の山を跨ぎ、血を見てきた。いままで活動写真の殺人場面でさえ目を塞いできた自分が信じられない。ひよつとしてやはり全ては夢だったのではあるまいか、そんな思いを捨てきれなかった。

「あの男が、そんな事を云っておつたか。まあ、大方嘘ではあるまい。この数日間、殺しも殺したり、我が城を殺戮の館に一変させてしまったのだからな」

杉山は肩をゆすって笑った。

「院長は……黒夢精神病院を……患者さん達を……実験に使っていたのですか!？」

杉山の笑い声がぴたと止み、無機的な表情で今日子を見詰める。

「……実験?」

今日子は一瞬、びくりと肩を震わせる。杉山の表情にさつき迄の冗談めいた様子が失せた。

「何の実験だね?」

「あ……あなたは……ドグラマグラの効果の実験をしていたのでは……ありませんか?」

云いながら、今日子はますます険けわしくなる杉山の表情に恐怖を覚えた。

「……ひよつとして君は、儂が長年の研究の実験の為に、黒夢精神病院を利用したとでも言うのかね?」

「ち……ちがうのですか?」

「馬鹿馬鹿しい。それはお前の勝手な勘違いというものだよ。今回の事件は純然たるアクシデントというものだ。……それにお前はいま、ドグラマグラなど迷信に違いないと自分で云いおったではないか」

「それは……そ、その通りです。そんな古文書がこの世に存在するなんて、信じられませんわ。今回の事件は、ウイルスか何かの仕業に決まっています!」

杉山は呵か呵かと笑い出した。

「人間の頭を狂わせる、そして周囲まわりの人間を次から次へと殺しまくる、そんな漫画みたいなウイルスが本当に存在するというのなら、研究してみる価値はありそうだながな。……では、試してみるかね?」

云うや、杉山は白衣の胸の内側に手を入れ、一冊の古びた書物を引っ張り出し、テーブルの上に乗と置いた。

「……………」

今日子は息を飲んだ。

古文書。

これが、ドグラマグラ?

表紙は擦り切れ、何が書いてあるのか読めない。確かに数百年前の文書と思えるほど古ぼけていて、触っただけでボロボロに千切れてしまいそうだ。黴かび臭い神秘的な匂いが今日子の鼻孔を突く。よく見ると、ところどころ真新しい血がこびりついていた。

恐る恐るそれを、手に取る。

心臓が高鳴る。

「……………これは……盗まれていたのではなかったのですか?」

『ドグラマグラ』の行方は今もって不明だ、と江口は云っていた。それがいま、何故ここに? やはりドグラマグラ盗難は、院長の狂言だったのか。今日子は自分の憶測を思いだす。

「盗まれていたんだよ」

杉山はあつけらんかんとして云う。「さつき取り戻したんだよ、江口からね。……こいつを盗んだのは江口なんだよ。奴の血だらけの白衣と一緒に、ゴミ箱に捨ててあったわい」

「は？」

今日子は暫し言葉を失った。

「そんな……馬鹿な事が！ 江口先生が、何のために、こんなものを!？」

「窪田君……君は江口をずいぶんと買いかぶっておる様だがな、あの男はそう大した人間ではないよ。確かにそれなりに仕事はできる男だったし、努力家でもあったがな。人間としては三流だ。だから今回の様な事件が起きたんだ」

「どついう事なのか……説明していただけませんか？」

杉山はひとつ、大きく鼻で息をすると、唾を呑み込んだ。

「あの男がいつから僕の研究に興味を持ち始めたのかは知らん。君も江口から聞いておるだろうが、こいつの研究は僕の幼少の頃の思い出から端を発する、ごく個人的なものだ。……それから、君や江口は誤解しとる様だが、この黒夢を設立した僕の本意は精神医学に携る者としてまったく真摯なものだよ。『ドグラマグラ』の実験に使うなどと、そんな馬鹿な事を考えるものか。第一、『ドグラマグラ』はお前達が考えている様な単純な代物ではない。……これは僕が一生を捧げて研究する価値のあるものだ。君達は、こいつが単なる狂人製造機だとも思つとるのだろうか、そんなものは君の云う通り、単なる『云い伝え』であり、『迷信』でも云うものだ。……そうだ窪田君、試しにそいつの中身をいま、開いてみ給え」

そういつて、杉山は古文書を指さす。今日子は目をまろくした。

これを開いて、中を見ると？

今日子は恐る恐る手を伸ばす。迷信だと解つていても、ちょっと気が引ける。今日子は古文書を手に取ると、頁に手を掛けた。

頁をつまむ指にちよつと力を入れただけで、パタリと本が開く。まるで、自分の意志が本に乗り移り、自ら本が開いてみせたかの様だった。

そこには、美しい着物姿の女性の寝姿が描かれてあった。頁を捲る。そこには、最初の頁からは想像もつかないようなおぞましい光景があった。更に頁を捲つてゆく。今日子は口を押さえ、最後の六頁目まで観終ると、黙ってそれを机に置いた。口を押さえているのは驚愕の為で、気分が悪くなった訳ではない。確かに正気の沙汰ではない絵図が描かれてはいたが、今日一日目の^ま当たりしてきた殺戮の連続に慣れていたせいか、淡々と見ることが出来た。もちろん、自分の精神になにか変化が起きたという感じはしない。

古文書には、六段階の、次第に腐乱してゆく死美人の姿が描かれていた。寝姿だと思つてい最初^まの絵も、きつと死んでいたのだろう。

「これは……どついう事なのですか、医院長？」

「あの男は……余計な事に儂の研究に首を突っ込んできたのだ」

杉山は今日子の言葉を無視して、話しの続きをしゃべりだす。

「確かに儂は完全な極秘の内に研究を進めていた訳ではないから、側近の江口が薄々研究の事に気がついてもおかしくはない。しかしそんな事、奴には関係のない事だ。儂が黒夢を経営する傍ら、個人的にどんな研究をやっていたかというと、奴の知った事ではない。奴は自分の本分のみを、黙々とやっていけばよかったのだ。……それに、『ドグラマグラ』の研究はおいそれと誰にでもできるものでもない。いや、この世でこいつの研究をできるのは儂を置いて他はない。……いや、なかつたといふべきかな、いまは」

杉山の言葉の最後には、なにか意味深な口調を帯びている。今日子は気にせず、杉山の話しの続きに聞き入った。

「……そうだな、単刀直入に説明してやろう。……御苦勞な事に、君は江口と一緒にこの数日間、狂人退治に躍起になっておった。ある日突然、病院の患者達が発狂・暴走し、君は訳も解らず江口に付いて、そいつらを退治しまくっておった。……だがな、それは嘘だ。君達は、幻想を見ていたのだよ。錯覚だったのだよ。実際には……狂っていたのは江口の方だったと云うべきだな。奴だけが狂っていたのだ。……他の人間はまともで、あの男だけが発狂して罪もない患者達を片っ端から殺し回っていたのだ、解るかね？」

今日子は言葉を失った。そんな馬鹿な話し、信じられる訳がない。

「信じられぬのも無理からぬ事だろうが……実際、患者達は誰一人発狂してはおらんかった。……逆に、江口は恐れ逃げ惑う人間達を追い回し、片っ端から殺し回っておったのだから、これは立派な狂人だな。あの状態でフラフラ外にでていったのだから、当然、同じ様に外を出歩く善良な市民を、同じ様に殺し回っておった事だろう。しかし、外は病院の中の様にはいかによ。恐らくすぐに警察にでも取り囲まれて、捕獲されたか、銃殺されただろう。……まあ、明日の新聞でも楽しみにしていようか」

「医院長のおっしゃる事は、わたしにはとても信じられません……江口先生はこの二日間、わたくしと一緒に、ずっと普通に接してくれましたわ」

「最初から順序立てて話そう。……まず、儂の『ドグラマグラ』を勝手に盗んで中を見て、発狂したのは江口だ。……そこまでは解るな？」

「解りませんわー！」

今日子は叫ぶや、頭を両手で抱える。「わたくしにはそんな風にはとても見え……」

「一週間前、院内でキャッチボールをしていた二人の患者の一人の投げたボールが運悪く相手に当たり、気絶した……ここまでは本当だ」

今日子は顔を伏せじつとしている。

「その後が問題だ。直前で『ドグラマグラ』を見て発狂状態にあった江口がそこを通り掛かり、まず気絶していた患者の首を絞めて殺した。恐れおののいたもう一人の患者が逃げようとした

所を、江口が取り押さえ、これも首を絞めて殺した。……これが真相だ。君は休んでいる間の出来事だ。江口の口から聞いた事の経過は忘れた方がいい」

ふいに今日子のすすり泣く声が聞こえた。杉山はかまわず続ける。

「江口は死体を引きずり、独房に放り込む。そして他の従業員に事態を報告する。江口の話しは要領を得ず、また、独房に放り込まれた患者も死んでいるらしい。従業員達はなんとなく江口の異変に気がつき始めているが、はっきりとは解らない。その日の内に、従業員の死体が幾つか院内に転がる。……もちろん江口の仕業だ。従業員達が会議室で話しあっている所に江口がやってくる。従業員共は逃げ惑う。それを江口はひとりひとり捕まえ、片っ端から殺してゆく。運悪く、その時点で従業員達は全て江口の手にかかって殺された。院内の状況が外部に漏れず、殺戮がそのまま数日も放置されたのはそのせいだ。……と云つても、他にもかなり運の悪い偶然が重なったの事だったのだがな。黒夢に來客が来ても、院内の異変に気付く前に江口に見つかって殺されたし、精神患者は数名逃げたが、やはり精神を病んでいるので、たま院内の異常事態を然るべき処へ正確に伝える事が叶わなかった。……まあ色んな偶然が重なって、殺戮状態は一週間もの間、黒夢に保存される事となった……そこに現れたのが、君だ」

「あ……あなたは」

今日子がふいに顔を上げた。その顔は涙に濡れている。「……もしそれが仮に事実だったとして、その間、医院長は何処にいらしたのですか？」

『『ドグラマグラ』が盗まれたとき、正直云つてすぐに江口の仕業だと解った』

杉山はまた相手の質問の脈絡を無視して続ける。「……江口は以前から僕の研究に興味を持っておつたしな、裏でいろいろ調べていることも知っていた。奴のファイルを見ただろう……そして江口がそれを手にする事によって、起こるべき事態も想像できた。……そこで僕は、ちょっと離れた処で観察してみる事にしたのだよ……事の成り行きをね。……そうだな、お前の云う『実験』と云うのもまんざら嘘ではないかもしれないな。……しかしな、僕としては予想だにしていなかった事だ。江口がそこまで僕の研究に首を突っ込んでくるとは思わなかったからなでもこれはチャンスだと思つた。僕の長年の研究にひとつの結論を下せるいい機会ではないかと。……だから僕は身を隠して、密かにこの事態を見守っていたのだよ」

「わたしには訳が解りません!!」

今日子は金切り声で叫ぶ。普段の彼女からは想像もつかない取り乱し様だった。

「それでは、……医院長は罪もない患者さん達がオモチャの様に殺されてゆくのを、黙って見ていたというのですか？……それに、医院長はさつき、『ドグラマグラ』なんか迷信だと云つたばかりではないですか！ あなたのおっしゃる事は何もかも無茶苦茶です！ 第一、わたくしはこの数日間、江口先生とずっと一緒にいました、先生はいつもの先生でしたわ！」

「落ち着け。……確かに多くの犠牲者を見殺しにしてしまった事は多少なりとも心が痛ましい事もない、しかし、これは僕の長年の研究の完成を目前にした僕に、天が与えてくれた、ま

たのない機会だったのだよ。……儂は長年、この古文書の出所を、あらゆる手を尽くして調べてきた。そしてこれが、千年以上前、中国のある絵師が時の皇帝の酔狂に依頼され描いた死美人画であるということまでつきとめた。そして遂に、この古文書にまつわる『言い伝え』の真の法則を解明する寸前まで辿り着いたのだ。……しかし、そこ止まりだった。それ以上は、実際のサンプルが必要だった。儂の長年の憶測を証明してくれる、格好の材料がね」

杉山は無精髭を擦りつつ、次の言葉を探す。

「……そうだ……窪田君、君は『パラレルワールド』と云う言葉を知ってるかね？」

今日子は黙ってうつむき、啜り泣くばかり。知らないに違いない。

「この世のどこかに、この世界とソックリな別の世界が存在するという説だ。いま流行りのSF小説などでよく使われるアイデアだが……『ドグラマグラ』はそれに似ている。云わば、この古文書はいままで君が住んでいた世界と別世界を繋ぐあやかしの扉という訳だ。この古文書を開いたものは、発狂するのではない。実際には、まったく違った常識と認識世界に移り棲むことになるのだ。そしてその世界と、我々が通常棲んでいるこの世界とは、まったく相いれる事が出来ない。それどころか、お互いが反物質のように殺傷しあうしかないのだ。江口は儂の父と同じ様に、この書物を開く事によって、その扉をくぐってしまったのだな」

今日子は泣き腫らした目を一瞬杉山に向けたが、すぐにまたうつむいて涙をこぼしだす。

「……医院長がおっしゃる事は、さっぱりわかりませんが……では、わたくしがこの数日間……江口先生と過ごした日々は何だったのでしょうか……？ 先生は……先生は、いつもと変わらない江口先生でした……もし……医院長のおっしゃる事が本当なら、わたくしはとつくに江口先生に……殺されていなければならないのでは……ありませんか……？」

「窪田君、『あやかしの扉』をくぐるのは、『ドグラマグラ』を開いたものだけとは限らないのだよ。……通常、『ドグラマグラ』を開いた人間と、普通の人間とは、同じ常識と認識を共有するのは不可能なのだが……それにはどうやら例外がある様なのだ。……その二人が特別に人間的、精神的感情をお互いに有している場合のみに、それは起こりうる。……そう、それはしいて言えば『愛情』という奴なのか、よく解らん。今回の事件で、儂が一番見届けたかったものはそれだったのだ。……具体的に云うと……窪田君、君と江口だ」

杉山は今日子の顔をじつと見詰める。今日子はその視線を感じて更にうつむいた。

「……君の江口に対する尊敬……愛情か、よく解らんが、その感情は、素晴らしいものだった。端から見ていて、涙ぐましいものがあった。実に何というか……美しかった。……窪田君、君は、江口の事が好きだったのだろう」

今日子は初めてポケットからハンケチをとり出し、涙を拭く。

「そして儂は思った。君と江口こそ、儂が長年考えてきた憶測を、現実に証明してくれる理想的なサンプルになりうると云う事を」

今日子は首を傾げ、考え考え、しゃべりだす。

「それでは……『ドグラマグラ』を開いて……その、『あやかしの扉』をくぐった者に、或る種の特別な感情を抱いているものが接すると……その狂気の犠牲者とならずに……逆に、その精神世界と同化し、丁度その……『ドグラマグラ』を開いたのと同じ状態になる……と、院長は、おっしゃりたいのですか？」

杉山は慢心の笑みを浮かべた。

「うむ、大体そういう事だ。……まあ、『ドグラマグラ』を開いた状態とまったく同じと云う訳ではないがな。……それどころかその者は、狂気の世界と、正常な世界との両方の認識世界に共存できる様になるのだ。……これが儂が長年抱いてきた説だったのだ」

杉山は少々興奮気味に語る。

「何が異常で、何が正常か？……それはある意味、非常に微妙であやふやな“常識”と云う基準の上に成り立っている。この世界では狂人だが、それはある別の認識世界では正常な人間として機能し得る。その境界線を打破する事ができれば、この世界は狂人のいない世界になる。全人類が狂人であり、同時に正常な人間となるのだ。これは大いなる人類の精神革命だよ……この古文書が、それを実現する唯一の手掛かりとなるのだ。狂気とは、最高の叡知なのだよ！」老人の精気に溢れた声が響き渡る。

「万能の叡知としての狂気を全人類に浸透させる。これこそが今後の、儂の、そしてここ新設・黒夢精神病院での研究テーマだ。窪田君、君には儂の新たな研究テーマのよき助手として、ここで働いてもらいたい」

杉山は満足そうに、真新しい病室をグルリと見回した。

「この建物は、儂がこの日のために、建設しておいた新たな病院だ。……いままでの黒夢は、研究の実験結果として多大な功績を残し、立派にその天寿を全うした。これからはここで、窪田君、君と、儂と、二人で研究をつづけてゆくのだよ」

「院長のおっしゃる事は……わたくしにはまったく理解できませんし……もちろん、院長の訳の解らない研究のお手伝をするつもりもありません」

今日子はキッパリと云いきった。

「窪田君、君にはぜひ協力してもらいたいのだ……君は、この世で儂をおいて他に、『ドグラマグラ』を研究できる、唯一の人間なのだからな」

杉山は目を細め、今日子を見詰めた。我が娘を見守る様な、そんな目をしている。

「窪田君……君は六十年前の儂と同じだ……思いだすよ、あの日の事をな」
そう云いながら、杉山はゆっくり目を閉じ、語りはじめた。

ザク、ザク、ザク、
表で畑を耕す音がする。
父が仕事をしているのだろうか。

しかし、畑は少し歩いた処にあり、耕す音がここまで聞こえるほどの近さにはない。
では、庭に塵芥ごみか何かを捨てる穴でも掘っているのか。

私は布団の上で身を起すと、障子を見詰めた。

障子紙ごしに、部屋に朝日が差し込んでいる。壁の大時計を見ると、もう十一時近くだ。折角の日曜日だというのに、ずいぶんと寝過ぎしてしまった。休日とはいえ、この様な時間まで目を覚まさない事は珍しい。

恐らく、昨日父と蔵の整理をした時の疲れが大分残っていたのだろう。ずいぶん重いものを運んだし、埃だらけの棚を、念入りに掃除した。

それにしても昨日の父は少し様子がおかしかった。もともと村中でも変わり者で通っていた父だったが、蔵の整理の後、急に口数が少なくなり、そのまま自室にこもって寝入ってしまった。何かあったのだろうか？

そう云えば思い当たる節がある。蔵の整理中、それ迄せかせかと動き回っていた父が、ふいに近くの箱に座り込んで、一心に何かを見詰めているひとときがあった。

近くに寄ってみると、父は何やら、古ぼけた本を開いて熱心にその中を見分している様だった。私とその本を横から覗き込もうとすると、父は慌ててそれを閉じ、その本がもとも入っていたと思われる箱の中に戻し、再び蔵の整理を始めた。私が、

「お父さん、いま、何を見ていたの？」

と聞くと、父は静かに首を振って、

「いいや、いいんだ。何でもない、何でもない……」

と、誰ともなしに呟く様な口調で、何度も繰り返した。その後だ、父が何事をしていても、どこか上の空で、おかしくなってしまうのは。……

ザク、ザク、ザク、

庭からは、相変わらず何かを耕す音がする。非常に理路整然とした単調な音が、一定の間隔で繰り返されている。

そうか、父が昨日蔵を整理して出てきた、いらぬガラクタを埋める為の穴を掘っているのだろうか。

私は起き上がると、ひとつ大きくあくびをして、障子に手をかけた。眩しい朝日が飛び込み、目がくらむ。

私は片手で目をこすり、そして、ゆっくりと、目を開けた。やはり父だった。

しかし、父は、穴を掘っているのではなかった。

その手にはいつも農作業で使う備中鍬を握り締め、一心不乱にそれを振り回している。父がそれを振り回す毎に、鮮やかな緋色の液体が、朝日を背景に、飛び散っている。

そして地面には、夥しい数の、真っ赤に染まった細切れの肉片の様なものが、あちこちに散らばっている。

よく見ると、それは皆、人間の身体の部分だった。

腕、脚、内臓、首、しかしそれらの殆どはどろりとした血にくるまれ、断面も乱暴に引きちぎられている為、身体の中の部分だかよく判別しなかった。

父はその中央で、ひとつの死体を解体している最中だった。

私に気がつくと、父は手を休め、そして、悲しそうに、微笑んだ。

「おはよう。胎蔵、大変な事になった」

父が近づいてくる。私は訳も解らず、立ちすくむ。父は私の両肩に手を置くと、深く鼻から息をついて、口を開いた。

「胎蔵、落ちて着いてお父さんの話しを聞きなさい。大変な事が起こってしまった。お母さんもおじいちゃんも、おばあちゃんもやられた。お父さんにも、はっきりと何が起こったのかは解らん。とにかくお前は暫くあそこで隠れていなさい。……もうすぐ終る。そしたらお父さんと一緒に福岡の叔母さんの処へ行こう」

父は私の手を引いて、蔵まで連れてゆく。

「ここで暫く待ってなさい、すぐ終る」

そう力強く私に云い聞かせると、父は蔵の扉を閉めた。

蔵の中は真っ暗闇だった。

暫くすると、奇声が聞こえた。

戸の隙間から外を覗くと、父が鍬を振りかざして何者かと戦っている。よく見ると、あれは近所の煙草屋のおじさんだった。

いつも小学校の帰りに気軽に声を掛けてくれる、あのおじさんだ。それがいま、動物の様な奇声を発して、父に襲い掛かっている。父は鍬を振りかざし、懸命に戦っていた。

その内、父の鍬の切先がおじさんの首筋に命中し、おじさんの首は紙の様に千切れ血が噴き出した。父は返り血を浴びながら、それを除けようともせず、またひと突き、またひと突きと、鍬をおじさんの身体に振り下ろした。

父は肩で激しく息を吐いている。そして私の居る蔵の方をちょっと振り返り、また解体作業の続きを始めた。

私には何が起こったのか解らなかったが、父の云う事を聞いてさえいれば、安心だと思った。全てが狂おしい朝だった。

唯一まともなのは父だけだった。

私は蔵の扉の隙間からときどき父の姿を確認しては、ひとり暗闇の中にうずくまり、目を瞑ってじっとしていた。

そしていつしか、眠りに付いた。

「……どれくらいの間がたったのか、儂は激しい物音に目を覚ました。外がいやに騒がしく、大勢の人の声がある。儂が蔵の外を覗き見ようとすると、ふいに扉があいた。……そこには、制服姿の駐在員が立っていた。彼は儂を見ると、驚いた様子を睨み、そして大声で叫んだ。『子供が生きています！』とな。その声を聞き届けるや、大勢の人が儂の回りに集まってきた。父の姿はどこにも見当たらん。儂は何だか無性に悲しくなって、大声で泣きだしたもんだ」

杉山は遠い目でしみじみと語った。その目は今日子を見ている。

彼女の姿に、昔の自分を重ねているのだろう。

「杉山家に伝わる古文書の事は、父から聞かされて知っていた。その事件と古文書を繋げて考え出したのは、ずっと後になってからだ。そして儂があつた村で唯一父と接して殺されなかった原理を思いついたのは、更にもっと後の事だ。そしてその、儂の長年考えてきた説が君という有能な助手によって証明されたいま、そして同時に君という人間が儂と同じ、大いなる叡知としての狂気を有する人間として生まれ変わったいま、儂の研究は更なる第二段階に向かつて飛躍を遂げるのだよ」

今日子は何とも言えない顔で、杉山を見詰めている。既に涙は乾いていた。

「窪田君、これで解ったかね。もちろん、協力してくれるね」

今日子は何にも言わず、目を伏せた。

「……まあいい、突然そんなことを言われても、心の整理がつかないだろう。独りでゆっくり考えることだ」

杉山は席を立つと、全てを話した満足感に酔いしれながら、部屋を後にした。

白い壁に囲まれ、そこに今日子が独り、残された。立ち上り、窓に身を寄せる。

硝子の向こうに目に入るものは木々ばかり。ここはどこかの山の中だろう。

隔離されたこの病院で、あの醜悪な老人と二人きり。いままで共に働いていた仲間達は、みんな死んでしまった。

そして江口先生、あのひとも、もういない。もう一生、逢えない、多分、逢えないんだろう。窓を開ける。優しい風が肌を包む。

今日子は風に抱かれるように、窓の外に姿を消した。

昭和三十三年、冬。

東京のとある街の一角に、薄汚い新聞紙の山に包まれ寝ている、一人の乞食の姿があった。その姿に目を留め、ひとりの初老の紳士が足を止めた。

人の気配を感じて、乞食が顔をあげる。焦点の定まらないプラスチックの様な瞳で、男を見上げた。口をぽかんと開き、なにやら言いたげに、唇をうごめかす。

乞食は女だった。伸び放題の髪は泥と体液で固まり、顔は日焼けか汚れで真っ黒に染まっている。衣服は所々擦り切れ肌が露出し、原形を留めていないほど乱れているが、彼女が着ているものは、間違いなく看護婦の白衣だった。

「久しぶりだね」

紳士の太く落ち着いた声がする。乞食女は相手の言葉を理解しないのか、口をぱくぱくさせながら首を傾けた。

「意識を閉ざしているのか？」

男はしゃがんで女の瞳を近くに見詰めた。薄汚れた硝子玉に、空気の傷が入ったような瞳が見える。なにも見ず、なにも語らない。男は女の手に握られている新聞紙の切れ端に目を止めた。

「……これは……？」

紳士はその手で千切ったような新聞紙の切れ端を奪うと、そこに書かれていることを読みはじめた。女は途端に力が抜けたように、ガックリと肩を落した。

都内有名精神病院副院長 江口誠一郎氏発狂す

今未明、都内の黒夢精神病院副院長、江口誠一郎氏が発狂徒となつて、池袋のオフィス街に出現、通りすがりの数十名の人々に鉈で無差別に暴行を加えていた処を射殺された。江口氏は一週間ほど前から、何らかの原因で精神に異常をきたし、同病院に勤務する従業員や患者、訪問者等を次々と殺害していった模様。同病院は昭和の初期より都内でも有数の設備を誇る精神医学施設として知られていたが、現在は殺戮の跡を生々しく留めた血の惨劇の館と化している。この度の事件での被害者は重軽傷者8名、死亡者153名にも上る。江口氏は日頃仕事熱心な真面目人間として知られ、何故今回、突如としてこの様な異常な行動に出たかはいまをもつて不明……

同時に、捜査本部は、黒夢精神病院狂乱事件の始まる直前から行方不明である同病院院長・杉山胎蔵氏の行方を追っている。……

「これは面白い。近頃山籠りが過ぎて、マス・メディアというものになかなか目を通す機会がなかったからな。……君、これを農に出来ないか？」

女は答えない。

男は黙つて、切り抜きを内ポケットに入れた。

「お礼に、こいつを一部、君にやろう。この数カ月の成果だ」

男は鞆の中から、一冊の新書を取り出した。

表紙には『ドグラマグラ』と書いてある。

「僅か二千部ほどだが、印刷したんだ。ちよつと形を変えてね。効果は薄いが、そのぶん、ジワジワと人類に浸透してゆくことだろう。この狂気がね。農にははつきりと見えるよ、日本の未来が。大いなる叡知と狂気を有する日本国民の愚かしくも輝かしい姿が。踊り狂い、群集し、奪い合い、騙しあい、潰しあい、時には殺しあいながら、狂おしくも充実に満ちあふれた、日本の未来が」

男は重そうな鞆を持ち上げ立ち上がると、歩きだした。女は動かず、男の背後を見送りもしない。ただ疲れたように俯いて、地面を見詰めている。

近くで女性の悲鳴が轟いた。

遠くで銃声が聞こえた。

車のタイヤが軋む音が聞こえ、鉄の固まりが激しくクラッシュする音が聞こえる。

どこかで五月蝿い音楽が鳴り響く。

大勢の笑い声が聞こえる。その中に混じって、微かに啜り泣く声も聞こえる。

色々な音が代わる代わる聞こえ、リレーの様に浮かんで消えてゆく。

突然、女は表情を苦痛に歪め、両手で耳を塞いだ。

それは初めて見せる、感情的な仕草だった。

女は地面に頭を擦り付けるようにしてうずくまると、そのまま眠るように動かなくなった。

(了)